

著者解題『日本のポストフェミニズム——「女子力」とネオベラリズム』

菊地夏野
(名古屋市立大学)

今日は研究会にお招きいただき、ありがとうございます。合評会って何を話したらいいのか案外難しいですね。とりあえずはこれを書いた背景や動機をお話しできればと思っています。

まず本書のねらいですが、私は90年代に学生時代を過ごしました。大学に入ってからずっとジェンダーやフェミニズムに関心があって勉強したりしてきたんですけど、90年代後半からバックラッシュの時代になり、それにフェミニズム側が対抗する形になります。それが取まってきた後、だんだんジェンダー論やフェミニズム論が面白くなくなっているという感覚をもつようになってきました。それはもちろんジェンダーの問題がなくなったということではなく、男女の経済的格差の問題はほとんど改善されないまま、DVやセクハラ問題も引き続きあり、差別の現実是不変なのに、それに対抗する批判の言説、文化が現実に対応していないような感じをもっていました。

そういう中でイギリスのアンジェラ・マクロビーという、カルチュラル・スタディーズ系の研究者の『The Aftermath of Feminism: Gender, Culture and Social Change』(SAGE Publications Ltd, 2018年)という本に、どこかで出会って、ちょっとずつ読む中で「これは日本にも当てはまる、日本で起きていることだ」という思いが強くなっていきました。これが本書の視点の一つ目です。私の本でもマクロビーの冒頭に出てくる「ポストフェミニズム」の定義を引用していますが、「バックラッシュとは異なる、ある新しい種類の反フェミニスト的感情の状況」「フェミニズムの要素は当然視されながら、もっと個人的な言説に変換され、メディア・ポピュラー文化・国家によってフェミニズムが代替されている状況」とマクロビーは定義しています。この定義も面白いと思いますが、日本ではバックラッシュまでは認知されていますが、その後、フェミニズムがどういう状況に置かれているか、あまり振り返られていないように思います。この定義を見ると、ここでいわれているのは「フェミニズムが制度化された、国の政策に影響を与えたり、教育に取り入れられていたり、文化の中でも言及されるよう

になったり」ということですが、それと同時に「脱政治化、フェミニズムが、もともともっていた力が奪われる形でポピュラーなものに変質している」ということをいっています。もちろんフェミニズムがすべてこうなっているわけではないんですが、かなり大きなところで、この状況は日本でも起きていると思っていて、ポストフェミニズム論を日本でも議論しなくてはいけないのではないかとすることで書き出したものです。

もう一つの問題意識として、私は博論で沖縄の売買春・セックスワークと軍事占領の問題や「慰安婦」問題について取り上げたんですが、その時のアプローチは「マイノリティの立場から国や社会全体を分析していく、マイノリティを取り巻く権力関係を見ていく」というやり方でした。それは90年代にアカデミズム内外に大きな影響を与えたスピヴァックのサバルタン論にもとづくものでした。その後感じたのが、日本におけるサバルタン・スタディーズ的な研究は大きなマップを描いたり、権力関係の断面図を見ることはできるんですが、マジョリティに対するインパクト、マジョリティ自身も持っているイデオロギー、認識、行動、歴史に切り込むには、やや足りないというか、サバルタンはどうしても周縁化されてしまうので、そこに目を向けるのは一部の人だけになってしまう。それだけだとマジョリティ自身も持っているものを見るには遠い感じがしていました。それもあって、この本のようなアプローチをとったという問題意識もあります。

視点の2つ目に、ナンシー・フレイザーがあります。フレイザーは厳しいフェミニズム批判、第二波フェミニズム批判で知られています。「第二波フェミニズムが資本主義やネオリベラリズムの道具になってしまった」と批判しています。このことも本の中で取り上げて論じましたが、アメリカ・イギリスと同じ形ではないとはいえ、この批判は日本にもあてはまります。第2章で取り上げた均等法と男女共同参画社会基本法、それから特に問題の大きい女性活躍推進法、そこを見るとフェミニズムを担ってきた人たち自身の思いとは異なるところで、でもそのボキャブラリーや気分が利用される形で資本主義の

新しい展開に使われてきています。

フレイザーに関しては『99%のためのフェミニズム宣言』（シンジア・アルツァ、ティティ・バタチャーリヤ、ナンシー・フレイザー著、恵愛由訳、人文書院、2020年）という、すでに25カ国語に翻訳されている、短めの本がありまして、それが今月20日（2020年10月20日）、人文書院から刊行されます。非常に面白い本で第二波フェミニズム批判から展開して、どういう新しいフェミニズムが必要とされているかをシンプルに論じたものです。ぜひお読みいただければと思います。その解説を書かせていただきました。

本が出たのが1年以上前になるので、その後、フェミニズムをめぐる状況がどんどん変わっていき、2017年にはアメリカでウィメンズマーチが行われますが、英米ではその前からポップカルチャーを中心としたブームが起きています。ここ数年ようやく日本でも起きていることはご存じだと思います。このフェミニズムブームのような状況を、どう評価するかも大きな論点になりますし、私自身もずっと悩んできた、考えてきたところです。一方で最近も、杉田水脈議員が「女はいくらでも嘘をつく」（2020年9月）という発言を刑法の性暴力改正を審議する場で発言して問題になりましたが、アンチフェミニズム、ミソジニー的な言動が、フェミニズムのブームの一方で同時並行して継続していることは重く見ないとはいけません。両面を見ないと片面だけでは何も見えてこないという感じがあります。

先日、たまたま喫茶店で読んだ女性雑誌『with』（2020年9月号）で見た記事が気になったので持ってきました。開いてすぐ12ページの目立つところの記事ですが、「働くわたし×SDGs」という記事があります。SDGsは国連の政策目標でその中に「ジェンダー平等」が入っています。大学でも理念やカリキュラム等に採用しているところがありますが、うちの大学もそうです。そのSDGsを冠した連載記事です。

「フェムテックで女性の生きやすさが変わる」とタイトルがついています。一見、フェミニズム的な「生理って我慢しなくてもいいの？」とか女性に優しいコンセプトの記事のように見えるんですが、中身はフェムテック、女性のためのテクノロジー、生理の日を快適に過ごすためのアプリや生理関連商品の宣伝で、「婦人科系疾患を抱える日本女性の年間損失6.37兆円以上」と金額化されて語られています。これも最近よく見慣れた、差別や人権問題に関するトピックも金銭化して語ってしまうレトリックが用いられている記事になっています。すごく悩まし

いというか、一見、フェミっぽくて、私もフェムテックにすべて反対しているわけではないのですが、性や生殖に関する技術、テクノロジーにどのように向き合うかは、ずっとフェミニズムが議論してきたことだったと思います。その議論がすっぱり抜け落ちている中で、こういう若い女性が読む雑誌でスルッと宣伝がなされている。

それから少し後のページで「これからの幸せを再定義する」という記事がありまして、これも読んでびっくりしたんですが、スプツニ子！さん、大学の教員もやっているタレントさんですが、卵子凍結の会社を興したようで「卵子凍結は幸せのバックアッププラン」として推奨しています。卵子凍結はグローバル大企業の一部でやっていることとか、アメリカで広められているくらいの認識しかなかったんですが、日本ではほとんど議論されていないと思います。こういう形で若い女性読者のもとに忍び込んできていることに危惧を感じます。

最後にもう一つ、後ろの方のページで「結婚の正体を探して」という社会学者の古市憲寿さんの連載ページがあって今月のゲストに三浦瑠麗さんが出ていて彼女が自分の結婚生活について語っています。三浦瑠麗さんというと先日もAmazonで不買運動が起きたこともある保守系の学者ですが（2020年8月にAmazonプライムビデオのCMに三浦瑠麗が出演し、徴兵制の提案等それまでの三浦の発言が問題視されていたことから、SNS上でAmazonプライム解約運動が生じた）、そういう方が、いわゆる政治的ではないテーマのところで女性誌に載っているという、どういう利権関係になっているのかわからないんですが、違和感がありました。私はメディア研究ではないので女性誌に詳しい方がいれば教えていただければと思いますが、ポップカルチャーの中ではポストフェミニズム的なことが普通に起きている、語られている、報じられていることにもっと注意しなければいけないと思います。

もう一つ、この間もスマホのニュースアプリでヘッドラインを見ていたら有名な女性タレントがテレビのバラエティ番組で「もし恋人から結婚したら家庭に入るようにいわれたらどうしますか？」という質問に対して、「あなたが自分より稼ぎが多いなら、と答える」と言って、それに喝采が沸いたと。結婚して女性が家庭に入るかどうかは、もちろんフェミニズムの大きなテーマですが、男性からの保守的な性別役割分業に沿うような意見への反論として「稼ぎが少ない方が家庭に入る」というロジックが支持されるというのも怖いことだなと思ったんですね。女性差別への批判に、資本主義のルールが適用され

る。これは今のポストフェミニズムの根本的特徴です。

というふうに現在は一方で、フェミニズムブームとして田嶋陽子さんが再評価される。そういうことがありながら広く見ると相変わらずの差別的な状況、しかも新しい形の差別の状況があって「フェミニズム」と「ポストフェミニズム」が混在していると考えべきなのではないかと最近は思っています。

そういうことを理論だけではなく、実際の女性たちの体験からどう見ていくかを探っていて取り上げたのが「女子力」の問題です。「女子力」もわりと日常的、頻繁に問題にする人がいたりしますが、研究としてきちんと取り上げたものはまだなくて、学生といっしょにアンケート調査をしたんですが、これがいちばんメディア的には注目されましたね。

次に、「女子デモ」。大阪で行われたものですが、「女子力」を調べていくと一見、新しいように見えるんですが、決してそうではない。古典的な女らしさが基盤になっている言語ですが、「脱原発デモ」で政治化する時に起きた葛藤が興味深かったのでインタビューしました。インタビューさせてくれた人たちの語りは今でも面白いものがあるなと思っています。

「慰安婦問題」も変わらずひどい状態で、韓国で現在、また新しい問題が起きていますが、先程の杉田さんの発言も慰安婦問題の事件を利用した発言で、これも日本の性差別がほとんど変わっていない証拠になってしまうものだなと思っています。

最後に「課題」として、あるところで評価していただいたものの中で「もっと具体的な女性労働者の実態、経験を研究する必要があるのではないか」といわれたんですが、「女子力」という言葉は働く場面でも大きく使われるものなので、その意味では関連しているんですが、もちろん労働者の方のインタビューなども考えていきたいと思っています。

今、考えている課題として「ポストフェミニズム論」について、やっている人がまだ少ないので、その中身を伝えると多くの人たちにも伝わるものだと思うので、もっと普及させたいなと思っています。「逃げ恥」のドラマも大きな話題になったんですが、これも「ポストフェミニズム論」の一連になると思っていて、そういうことも考えたりしています。

フレイザーらがやっている「社会的再生産論」ですが、新しく出る『99%のためのフェミニズム宣言』でも論じられているので、これも考えていきたいと思っています。私からの解題は以上になります。

【質問】

質問： 菊地さんの中でナンシー・フレイザーとマクロビーが、どういうふうに関係されているのかを聞かせていただきたいという趣旨ですが、フレイザーの方は「ポストフェミニズム」は言っていないと理解していて「ネオリベ」に関してはしっかり発言している。「ポストフェミニズム」を言っているのはマクロビーの方で「ネオリベ論」をやっているフレイザーと「ポストフェミニズム論」をやっているマクロビーと。それぞれ批判理論の系譜から、この二つで現在社会を分析すると、よく分析できるなというのが菊地さんの理論を読ませてもらって勉強になりましたが、この二つを菊地さんの中で理論上、どういうふうに位置づけておられるのか。一番わかりやすい説明は「ネオリベ論」がマルクス主義でいう下部構造のような経済構造で「ポストフェミニズム」は上部構造の話をしているのだと、とりあえず、そう説明した上で、「上部構造と下部構造では説明できないんだけどね」と。そういう理解でいいのかどうかを聞かせていただきたいなと思います。

菊地： 上部構造と下部構造に当てはめるのは、どうなのでしょう。フレイザーは怒るのではないかなと思います。フレイザーの90年代の「再分配」と「承認」の議論を思い起こすと、フェミニズムの問題を上部構造で、階級の問題を下部構造にするという考えとは全く異なります。フレイザーはそういう考えを問題視したので私にはそういう説明はできないかなと思います。

その前に、この二人で気になるのがフェミニズムへの距離が違っていることで、そこが面白いというか、フレイザーの場合は「第二波フェミニズム」をかなり厳しく批判しているので、やや距離があるのかなと思うんです。フレイザーの「フェミニズム批判」を、アンチフェミニズムが悪用して「だからフェミニズムはだめなんだ」と使われているのが危険だという話は、よく聞きますし、私も、そうだと思うんですが、それに対してマクロビーの方はもっとフェミニズム寄りというか、第二波にアイデンティファイしてきた人で、その立場からの内省的な「ポストフェミニズム論」なので、その違いが面白いと思っていました。その後、最近、トランプの政治になって以降、フレイザーも少し変わってきて、フェミニズムの運動の中からもっと論じるように、声を上げるようになってきているので、それが『99%のためのフェミニズム宣言』で書いていて、そこが面白いなと思っています。たとえばマクロビーなどカルチュラル・スタディーズ系の

研究者は『99%のためのフェミニズム宣言』にどう関わるのかなと思ったりしているところです。

【付記】

本会は、著者にとってたいへん実りある時間だった。名だたる研究者の方々にコメント、ご質問ご意見をいただくことができた。フレイザーの理論的検討、社会政策からのポストフェミニズム論への疑問、フェミニズムと個の関係性、夫婦別姓・同性婚の評価、さらには開発とポストフェミニズム戦略、リプロダクティブ・ヘルスとネオリベラリズムなどなどここに掲載できないのが残念である。重ねて残念なのは、こういったネオリベラリズムやポストフェミニズムについて論じ、語り合える場が日本ではまだ少ないことである。本会を受けて改めて、そういった設定へのニーズを感じることができた。その意味も含めて、参加してくださった皆さま、研究会のみなさまに感謝の意を記したい。

【編集注】

著者解題後の質問のみ本稿では取り上げているが、全体ディスカッションについては参加者の許可を得ていないので、掲載を見送った。